



Title	ケニア・ラム島におけるムスリム女性の生活史
Author(s)	井戸根, 綾子
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58808
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 大阪大学の博士論文について をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	井戸根 綾子
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲第77号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	ケニア・ラム島におけるムスリム女性の生活史
論文審査委員	主査 教授 中島 久 副査 教授 高階 美行 副査 教授 勝田 茂 副査 東京外国语大学 稔田 乃 副査 名誉教授 宮本 正興

論文の内容要旨

本論文では、ケニア北東沿岸部に位置し住人の大多数がムスリムであるラム島における女性の生活史を研究するものである。本論文で主に焦点を当てるのは、自らは経済力を持たず、夫などの男性に収入を頼る家庭内の女性である。男性を中心とする「外」の世界には明確に表われることのない女性たちの構築する世界に目を向け、そこに生きる女性たちの姿とその背景、周囲を取り巻く社会的環境、男性との関係に注目をする。

女性の世界を理解する上で、婚姻と女性との関係性は注目すべき点である。婚姻は女性の人間関係の拡大を意味するものである。また婚姻の背景には文化、宗教、経済、社会といった重要な要素が関わっており、それらは、男女の相互関係や各々の社会的立場にも影響を与える。本論文はラム島におけるイスラーム、女性規範、文化の間に見られる動態的関係を背景にして、女性の婚姻に関わる問題を中心に論を進めるものである。

女性が人生において結婚、離婚、再婚を体験する過程において、社会における多面的かつ複合的な男女関係の性質、および女性の位置づけがそこに反映される。そこで本論文は、ラム島で生活してきた女性の人生とその背景を基盤として論を進める。本論文は、個々のライフ・ヒストリーを中心とする女性たちの「語り」を資料とし、婚姻を通じて、女性がどのように自己と社会についての認識をし、人間関係を構築しているか、その過程と社会的背景を明らかにする。そして本論文は、ラムにおける婚姻に関する社会的規範を示しながら、社会的規範に対する女性の態度を示す材料として、「語り」を利用する。

本論文の研究内容としては、以下の項目が挙げられる。

- (1) 調査協力者のライフ・ヒストリーを資料としてすることで、ラムにおけるムスリム女性の生活史を、婚姻を中心にして提示する。婚姻と女性との関

わりを明らかにし、婚姻を通じて女性同士の関係、男女の関係が構築される過程を示す。

- (2) 婚姻の社会的規範と実態を明らかにし、比較する。結婚、離婚、再婚を経験する女性を取り巻く社会的背景をさまざまな側面から記述する。婚姻に関わる女性自身の価値観と物事のとらえ方を探り、女性が社会的規範に対してどのように対処し、自身の生活の中に適用させているかを把握する。
- (3) 女性の経験する生活に社会変容の影響がどのような形で表われているかを明らかにし、世代間による価値観や男女観の変化を示す。

本論文では、女性が結婚、離婚、再婚を経験する過程、そしてそこに表われる女性と婚姻との関わりを明らかにし、さらには女性同士の関係また男女の関係を構築する過程についての考察を試みる。そして同じ女性同士が婚姻を通じて互いにどのように関わり合い、また、女性が男性とどう折り合いを付けながら関係性を維持、また適応していくのかを示すこととする。

本論文では、ラムにおける婚姻に関わる社会的規範と実態を比較する。ここでの社会的規範とはとくに社会に構築された女性規範に基づく建前を指す。女性規範とはいわゆる「女性らしさ」を規定する社会的規範であり、そこには初婚前の女性の純潔を保持し管理する規範を含む。女性規範に対する理解の仕方や態度には女性がおかれている社会の変化が反映され、それは女性が実際に行動した結果である実態につながる。ラムにおいて婚姻がムスリムにとってどういう意味を持つものであるか、そして婚姻や男女関係に関するイスラームの教えがどのように解釈されているかということは、ラムの社会における社会的規範と実態を理解する上で極めて重要である。

本論文では、女性が男性との関係性においてとらえている婚姻にまつわる価値観や考え方を示すこととする。女性にとって離婚は人生における一般的な経験であるととらえられているラムでは、時代や社会環境の変化にともない婚姻に関する女性の意識は変化しつつある。時代の変化と共に家庭内で過ごしていた女性が外の世界と接触する機会が増え、それは男女関係にも多大なる影響を与えることになる。結婚や恋愛に対する女性の態度、男女関係の性質、女性の世界での人間関係がどのように変化しているかに注目し、その変化の結果生まれた世代間の相違を描く。

本論文は7章で構成され、各章における内容は以下の通りである。

第1章においては、本論文の研究目的とそれを明らかにするための方法、先行研究と本論文の位置づけ、さらに本論文の基礎となる調査方法とその協力者について記述する。

第2章では、研究対象地となるラム島およびその中心地であるラム・タウンの概要を述

べる。調査協力者の背景や現代に至るまでの社会変容と関わるラムの歴史、地理、社会背景を紹介する。

第3章では、少女時代の成長過程においてムスリム女性へと育成された後初婚を迎えるまで、ラムの女性の経験するmsichanaからmwanamkeへの移行とその前後の過程を追う。女性として生きる過程を各段階ごとに区分し記述することにより、そこで構築されている女性の世界、そしてその中で生きる女性の姿をより鮮明に描く。婚礼がラムの女性にとってどのような役割を果たしているのかに注目し、社会背景や歴史をふまえた上で考察を行う。

第4章では、社会における女性と出産および育児との関係、また女性がそれらにどのように携わっているかを明らかにする。また結婚後の女性と夫、夫の家族、実家といった周囲の人間との関係性を注意深く掘り下げながら記述する。

さらに、男女が互いに関係を構築していく上で、欠かすことのできない経済的要素を明らかにする。また、死亡や別離によって夫との関係性を失った晩年の女性を支える生活基盤の概要とその背景を明らかにすることで、晩年の女性を取り巻く社会的環境を示す。

第5章では、夫との結婚生活の終焉である離婚と死別を女性がどのように経験しているかを明らかにする。自らの収入源を持たず自立することもままならない彼女たちが、どのように夫との別れと対面し人生における選択を行なっているのか、またそこにどのような背景があるのかを探る。

第6章では、ラムにおいて離婚と同様に再婚が困難ではないことの社会的背景、女性にとっての再婚の意味を考察する。初婚とは異なる女性自身の再婚との向き合い方を示すことで、婚姻自体に対する女性の態度を探る。さまざまな点から初婚と再婚の違いを比較しながら、そのような違いをもたらす要因と結びつく社会的背景や男女関係に関する意識や観念を提示する。

終章である第7章では、本論文において明らかにされた事実を整理し、記述に基づく分析と考察を総括する。また、本論文では女性の視点を中心としたが、本論文の研究目的の発展性を考察するとともに、男性の視点を取り入れた上で男女関係をとらえ直すといった今後の展望について述べる。

論文審査の結果の要旨

1. 本論文の概要

博士論文「ケニア・ラム島におけるムスリム女性の生活史」は、ケニアのラム島に住むムスリム女性 30 人の調査協力者から得られたインタビュー質問形式の調査データと、その 30 人中の 12 人各々から聞き取りしたライフヒストリーと、加えて調査協力者との日常的な交流の中で得られたデータの 3 種の資料をもとにして次の 3 点を論述したものである。

- (1) ラム女性の生活史を提示する。
- (2) 結婚・離婚・再婚について社会的規範と実態を明らかにする。
- (3) 社会変容に対する対応とその世代間の差異を明らかにする。

本論文は、400字原稿用紙にして900枚を越え、7章構成で、各章は以下の通りである。第1章は、研究の目的と方法、先行研究と本論文の位置付け、調査概要などを内容としている。

第2章は、研究対象地であるラムの歴史・人口動態などの概略と、ラム島の中心地ラム・タウンの地区・階層・雇用などの概要を記述している。

第3章は、女性の生活史のうち結婚までを取り扱っている。未婚女性の生活から婚礼行事の実態を記述し、婚礼行事の変遷を考察している。特にその中で盛大な女性だけの婚礼行事であるkupambaを詳述している。

第4章は、結婚生活にからむ出産育児・家族関係・経済から、晩年の生活、それに女性間の交流を論述している。

第5章は、夫との別れとして離婚と死別にわけて、まず離婚の実態や理由、離婚後の子供の処遇などを扱い、次に葬儀を詳述し、更に寡婦の生活や相続問題を論述している。

第6章は、再婚の実態・方法・理由を述べ、その中でラムを含むスワヒリ文化圏に特有と思われるイスラーム法解釈による同じ夫との再婚を論じている。

第7章は、終章として本研究を総括し、その限界を見極め、更なる研究の発展への展望を開いている。

2. 審査要旨

本論文の審査にあたり、①本研究の独自性、問題設定の明確さ、②論文の構成と実証性、③論述・論旨の明確さ、以上の3点に留意し議論して、下記のような結論を得た。

本論文は、ラムの現代女性の生活史を、少女期から婚姻を経て妻となり親となり、女性によっては離婚や再婚を経験し、やがて迎えた老後の生活、そして葬儀までを詳細に記述した。ラムの女性が辿る生活史の過程を、その中で生じる個々の事象そのままではなく、連関しあう関係の中で捉え記述したものであり、このような研究は今までになく斬新なものであり、本研究の独自性を示すものである。

既存の文献資料には結婚・離婚・再婚を個々に論述しただけで、相互に関連させて記述し考察したものではなく、本論文は相互に関連させた記述・考察に成功している。

更に、ラム女性の高い離婚・再婚の理由に関して今まで深く考察された研究はない。この問題について、本論文は離婚・再婚に対する考え方・意識、離婚・再婚に関する経済的側面、離婚・再婚後における子供の処遇の3点から考察したものである。離婚・再婚に対して、ラムのムスリム女性は現実的な考え方を持ち、それが社会的にも受け入れられている実態を明らかにしている。また、その経済的な側面に関して、離婚後の生活は実家などによって支えられること、そして離婚・再婚に際して子供を場合によっては実家や親戚などが引き取る実態を詳細に記述した。これに関してさらに一般的に、離婚・再婚後の育児を含めて、育児が女性たちの協力作業であることも明らかにしている。

今まで殆ど明らかにされてこなかった女性間の交流についてその一面を明らかにした。特に、夫の実家との関係について興味深い事実を記述している。夫婦が夫の実家から支援を受ける際に、夫が直接受けるのではなく、妻が夫の実家の女性から支援を受け取る。また離婚後も元妻が元夫の実家の女性と交流を続ける。

以上の点から、本研究はラム女性の研究を発展させ、ひいてはスワヒリ文化圏女性の研究に貢献するものである判断した。

しかしながら、本研究についていくつかの検討課題が指摘できる。

本論文末にも触れられているが、本論の調査協力者 30 人のラム社会における位置付けがはっきりしない。本研究はラム女性の生活史に関わる諸問題を記述し考察し、その一端を明らかにしたものであるが、それとラム社会全体との関係がまだ未解明のままである。

ラム社会に住む人々の、特にラム女性の結婚・離婚・再婚に実態の一端が本論文によって解明されたが、その実態を支える、結婚一般に対する基本的な観念が提示されず、論証課題となっている。

高率の離婚・再婚などに女性が抱える諸問題に対して支援する内の世界・女の世界について実態の論述が断片的で全体像が提示されていない。また、この問題に関わる女性間の交流の記述は端緒的なもので不十分であり、加えて女性の社会的影響力をまとめた論述が残されている。

3. 審査結果

以上のような検討課題があるものの、それにより本論文の価値を大きく損なわれることはない。

本審査委員会は、本論文が既になされたラムおよびスワヒリ文化圏の女性に関する研究の諸業績を踏まえて、数度に渡る現地調査によるデータをもとに、独自の問題意識による研究課題を実証的に解明した論考であり、スワヒリ文化圏女性の研究は勿論、アフリカ及びイスラーム圏女性の研究に寄与しうるものであることと、加えて最終試験の結果を考え合わせた上で、本論文が博士（学術）の学位を授与するに値する研究であるとの結論に達した。